



「龍馬は土佐の人間に本当に愛されていた」と語る山本氏。撮影=幸田 森

司馬さんは『土佐の龍馬』を『日本の龍馬』にしてくれた人。そういう恩義を、土佐の人はみな感じています。ただ、『龍馬がゆく』の新聞連載中は、私はまだ子供だったから、読んでいたんじやないかと。それでも、土佐中が喜んでいたんです。それとも、土佐中が喜んでいたことはわかつていました。

私の曾祖母は、龍馬に会ったと言っていたそうです。鏡川という、高知の街中を流れる川の

司馬さんの小説では『燃えよ剣』がいちばん好きですね。いいものを読んだ、面白いものを読ませてもらつたという深い満足感があつたし、司馬さん自身も、物語を紡いでいく喜びを感じながら書かれていたんじゃないかと。尊敬する方に対して僭越ながら、そう思いました。

司馬さんと

エラリー・クイーンについて

どういうことかと言えば、たとえば、ある登場人物が黒い手提げカバンを持つていて、その一行の描写が、後になつて効いてくる。ミステリだから読者にトリックを見抜かれないと心の注意を払いながら、しかし、過不足なく、情報を見て提示している。それを見事にやっている作品だと、エラリー・クイーンは評価していました。

今はわかりやすさが求められる時代なので、これを実践するのはなかなか難しいところがあります。一行、二行のさりげない描写が後で意味を持つという書き方をすると、それじゃ読者は伝わりませんからもつと詳しく書いてくださいと編集者に言われてしまつたりね。もちろん小説にはいろんな在り方があります。

ただ、司馬さんの作品を読むと、エラリー・クイーンが『魔の森の家』で評価したことを、まさに実践していることに気づいたのです。言いすぎず、しかしすべてを提示して、読者にわかることを、時代小説でやつていた。司馬さんを読むようになって、『ミステリ・マガジン』に書いてあつたのはこういうことだったのかと具体的にわかつて、感銘を受けたことを覚えていきます。

司馬さんを読むようになつて、わかつたことがあるんです。先ほど述べたように、私はそれまで時代小説を読んでいなかつた。若い頃は翻訳ミステリの虜だつたから。中学生の頃、『ヒットコックマガジン』と『エラリー・クイーンズ・ミステリ・マガジン』という翻訳雑誌一冊が覇を競つていたんですね。私は『ヒットコックマガジン』のほうが好みだつたんだけど、ミステリにのめりこむきっかけになつたのは、『エラリー・クイーンズ・ミステリ・マガジン』の創刊号に掲載された『魔の森の家』（カーター・ディクソン）で、この作品自体も面白いんだけど、エラリー・クイーンの解説が素晴らしいくてね。「この作品はすべてを提示している」と言つているんです。

「土佐の龍馬」を 「日本の龍馬」にしてくれた人

山本一力（作家）

土佐生まれの作家、山本一力にとって、坂本龍馬と司馬遼太郎の名前は分かちがたく結びついている。自らも『龍馬奔る』で龍馬を描く作家は、偉大な先駆者、司馬の作品をどう讀んできたのか？

上流に龍馬は住んでいて、その川べりを歩くのを見たことがあると。もちろんそのときは、彼が龍馬だとわかつていなかつたはずです。でも、背が高くて、様子がよくて、後になつて、あれは龍馬だつたに違いないと。歴史上の偉人になつた龍馬に会つたことがあるというのは、曾ばあさんの大きな自慢だつたらしい。それほど土佐の人間に愛されていましたとあります。私はそういうなかで育つていますから、坂本龍馬＝司馬遼太郎というのを刷り込まれて大人になつたんです。

司馬さんの小説で最初に読んだのは『梶之城』でした。二十代の頃でした。時代小説ってこんなに緻密に書かれてるものなのかと、時代小説の印象が変わつた。といつても私は時代小説読みじやなかつたんだけど、『錢形平次』のような捕物帳が時代小説だと思つていたところがあつたんです。錢を投げて敵を倒すといった、空想が入り混じつたエンターテインメントをね。ところが『梶之城』はそれとはまったく異質だった。武士の作法を、それこそ箸の上げ下ろしまで、緻密な物語のなかに溶け込ませてあって、司馬さんつてこういう小説を書かれる人なのかな、他の作品も読まなきやという気持ちにさせられました。その後、『龍馬がゆく』も読みました。